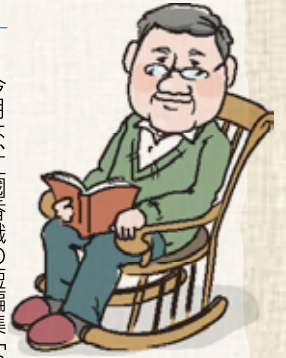


「デューク」



著者：江國香織  
発行：新潮社  
ISBN：9784101339139  
1996年5月29日発売 ¥420



今月は、江國香織の短編集「つめたいよるに」の中から「デューク」を紹介します。デュークは平成13年の大学入試センター試験の国語の問題として、全文が出題されましたが、それくらい短い小説です。

愛犬のデュークを老衰で亡くしたばかりの21歳の女性が、愛犬の死の翌日もアルバイトに出かけるのですが、電車の中でも泣き続ける彼女に、ハンサムな少年が席を譲ってくれます。終点の渋谷に着くまで深い目の色をしたその少年が、満員電車の雑踏から、さりげなく主人公をかばってくれていました。

「コーヒーごちそうさせて」と彼女が誘うと、「朝ご飯まだなんだ。オムレツもたのんでいい」と聞いてきます。彼女はアルバイト先に電話をして風邪を理由に休むことにしました。少年は休みになった彼女をプールに誘います。12月の朝っぱらからプールに入るような酔狂な人は誰もいなくて、二人は水の中を唇近くまで泳ぎまわります。アイスクリームを食べながら歩き、地下鉄で銀座に出て、美術館で絵画を鑑賞し、演芸場で落語を聴くことになりました。しかしいざ中に入ると主人公はだんだんゆううつになってきます。『デュークが死んで、悲しくて、悲しくて、息もできない』

ほどだったのに、知らない男の子とお茶をのんで、プールに行って、散歩をして、美術館をみて、落語を聴いて、私はいったい何をしているのだろう。一度も笑えずに演芸場を出て、『大通りまで歩いたころには、もうすっかり、悲しみがもどってきていた。デュークはもういない。デュークがいなくなってしまう。大通りにはクリスマスソングが流れ、うすい青い夕暮れに、ネオンがぼつぼつつきはじめていた。『今年ももう終わるなあ』少年が言った。『そうね』『来年はまた新しい年だね』『そうね』『今までも、僕はたのしかったよ』『そう。私もよ』『下をむいたまま私が言う』と、少年は私のあごをそっともちあげた。『今までも、だよ』なつかしい、深い目が私を見つめた。そして、少年は私にキスをした。私があんなにおどろいたのは、彼がキスをしたからではなく、彼のキスがあまりにもデュークのキスに似ていたからだった。ぼうぜんとして声も出せずにいる私に、少年が言った。『僕もとても、愛していたよ』淋しそうに笑った顔が、ジエームス・ディーンによく似ていた。『それだけ言いにきたんだ。じゃあね。元気で』そう言つと、青信号の点滅している横断歩道にすばやくとびだし、少年は駆けて行ってしまった。私はそこに立ちつくし、いつまでもクリスマスソングを聴いていた。銀座に、ゆっくりと夜が始まっていた。』